

成人看護学における「循環障害のある患者の看護」の授業評価に関する研究

小野 晴子¹⁾*・住野 好久²⁾

1) 看護学科 2) 岡山大学大学院教育学研究科

(2009年2月4日受理)

本研究は、成人看護学Aの「循環障害のある患者の看護」における学生の授業評価を実施することを通して、本授業の改善を要する点を明らかにし、今後の教授活動や教材の改善の手がかりを得ることを目的としている。対象はA短期大学看護学科2年生であり、「授業過程評価スケール-看護学講義用-」を用いて調査を実施した。

その結果、授業全体の評価の平均点は3.5点であった。評価の高かった項目は「具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」であり、「具体例・事例・経験談などで抽象的な内容を具体的に説明した授業」であったと評価された。

低かった項目は「学生への対応」で、3.3点と平均点より若干低かった。「教員は学生への一方的な講義ではなく学生も参加できた」や「教員は学生の発言を取上げて講義を進めていた」といった項目の評価が低かった。

今後の授業改善の課題として、学生への一方的な講義ではなく学生の発言を取上げ、学生も参加できるような授業を展開する必要性が示唆された。

(キーワード) 成人看護学, 授業評価, 授業過程評価スケール

はじめに

近年、循環器疾患を取り巻く医療は目ざましく進歩している。個々の患者のQOL向上を旨とした医療体制の整備が推し進められてきた。看護師は医療チームの一員として患者のQOLの向上に向けて、注意深い観察とアセスメントにもとづく看護をすることが求められる。そのため本授業では、学生たちが既習の医学的知識を踏まえて、循環障害のある患者の観察とアセスメントにもとづいてQOLの向上を実現する看護を理解できるような授業展開が求められる。では、本年度の「循環障害のある患者の看護」の授業は、こうした課題に応えることができたのか。

そこで、講義終了後に授業評価を実施し、本授業の成果及び改善を要する点を明らかにする。そして、その結果を考察することを通して、授業の質の向上を図るための教授活動や教材の改善など授業計画、授業方法を見直し、講義の質を向上させる。

I. 用語の定義

1. 授業過程評価スケール-看護学講義用-

「授業過程評価スケール-看護学講義用-」とは、舟

島らりが開発した教育活動の質を測定する尺度である。特徴は、「看護基礎教育課程に在籍する学生の講義過程に対する評価基準を網羅し、学生の視点を反映している」点にある。

2. 成人看護学A

「成人看護学A」は、看護学科2年次前期に開講している「呼吸障害のある患者の看護」「循環障害のある患者の看護」「腎障害のある患者の看護」の3つの単元から構成される、1単位(30時間)の授業科目である。

授業目的は、成人患者の身体的・心理的・社会的特徴を把握したうえで、看護の目的と機能を理解し、基本的看護の実際を学ぶことにある。

II. 研究目的

成人看護学Aの単元「循環障害のある患者の看護」の授業において学生による授業評価を実施し、本授業の改善を要する点を明らかにし、今後の教授活動や教材の改善の手がかりを得る。

III. 研究方法

1. 研究方法: 留め置き法による自記式質問紙調査。

*連絡先: 小野晴子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

2. 調査対象：A短期大学看護学科2年生63名。回答は42名（有効回答率66.7%）。
3. 調査期間：2008年12月22日～24日
4. 調査内容：成人看護学Aの「循環障害のある患者の看護」に関する授業を舟島ら²⁾の「授業過程評価スケール-看護学講義用-」を用いて、「講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達」「学生への対応」「教材の活用・工夫方法」「具体と抽象の連関と教員意見の折込の程度」「内容の質と独自性」「内容の難易度と時間的ゆとり」「教員の話術」の7領域38項目に分類して測定した。
5. 分析方法：統計ソフトSPSS 16. J for Windowsによる統計処理を行なった。また、調査項目を「非常に当てはまる」5点、「かなり当てはまる」4点、「大体当てはまる」3点、「あまり当てはまらない」2点、「全く当てはまらない」1点の5段階間隔尺度を用いて評価した。
6. 倫理的配慮：A短期大学看護学科2年生に研究の趣旨と内容を口頭で説明した。研究目的以外には使用しないこと、研究協力は自由意志であること、個人が特定できないよう匿名性を保持した統計処理をすることを説明した。回収は回答箱を用意し、自由に回答ができるようにした。また、舟島らの「授業過程評価スケール-看護学講義用-」を用いることを事前に承諾を得た。
7. 「循環障害のある患者の看護」授業計画

「循環障害のある患者の看護」を10時間（5コマ）で授業を以下のように展開した。

単元目標を、①循環器疾患患者にもたらされる症状を緩和するための看護活動について学ぶ。

②循環器疾患患者に行われる検査、治療、処置について把握し、もたらされる患者の苦痛の理解とおこりうる合併症を予測し、予防するための看護活動について学ぶ。

③循環器疾患患者の身体的・心理的・社会的な健康問題を把握し、看護の実際について学ぶ。とした。これらの目標を達成するために授業計画を行った。（表1）

特に教授しておきたいこととして、各疾患の急性期に起こりうる致命的な心不全や心破裂、不整脈などの合併症の予防と迅速かつ適切な判断に必要な観察とアセスメント能力、観察と継続的な看護を重要視した。さらに、突然に発症することが多い場合や家庭や職場で重要な役割を担っている壮年期に発症するために、患者や家族が直面する不安や苦痛ははかりしれない。患者家族の身体的・心理的・社会的な問題に対する理解を深められるよう、筆者の経験事例を用い、患者や家族の思いをできるだけ伝えるようにした。また、病態と症状の既習学習を効果的に活用するために、主としてパワーポイントで本時の主題や項目を示し、視覚的には、心臓の模型や冠状動脈の模型をもちいて実際に触るなどで興味や関心を持てるような工夫やDVDを使って不整脈の心電図パターンを動的に学べるようにするなど、テキストのみでなく筆者自らの著書³⁾の活用や他の参考文献を使って授業を展開した。

IV. 結果

成人看護学Aの単元「循環障害のある患者の看護」10時間の授業終了後に実施した授業評価の結果は以下のとおりであった。

1. 講義の領域別得点

7領域の平均点は、3.5点であった。7領域の中で最も平均得点の高かった項目は、「IV. 具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」の4.0点であった。次いで、「III. 教材の活用」で3.9点、「I. 看護過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達」で3.9点、「VI. 内容の難易度と時間的ゆとり」、「VII. 教員の話術」の3項目が3.7点で同点であった。次いで、「V. 内容の質と独自性」の3.6点で、次が「II. 学生への対応」3.3点であった。（図1）

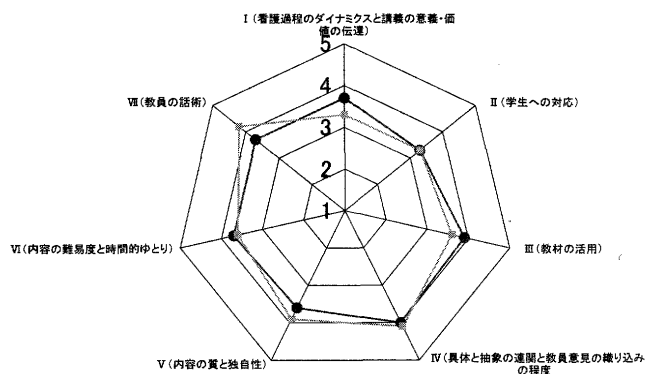


図1 下位尺度別平均得点

表1 授業計画「循環障害のある患者の看護」

回	授業内容	授業方法	備考
第1回	循環障害のある患者の特徴	講義	
第2回	心不全患者の看護	〃	心臓模型
第3回	心筋梗塞患者の看護	〃	冠状動脈模型
第4回	不整脈のある患者の看護	〃	
第5回	高血圧患者の看護	〃	VTR
第6回	終講義試験(3単元1単位分)	ペーパー試験	

1) 「IV. 具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」の内訳

領域IVの5つの下位項目をみると、「具体例・事例・経験談などで抽象的な内容が具体的にわかった」と「教師自身の意見や考えを適度に示していた」の2項目が4.1点で最も高かった。次いで、「難しいテーマや内容について

は、実例を示したり、具体的な説明があった」と「一つの考え方として教員自身の意見を示していた」の2項目が4.0点であった。続いて「専門用語やなじみのない用語に対し、わかりやすい説明があった」で3.8点となっていた。(図2)

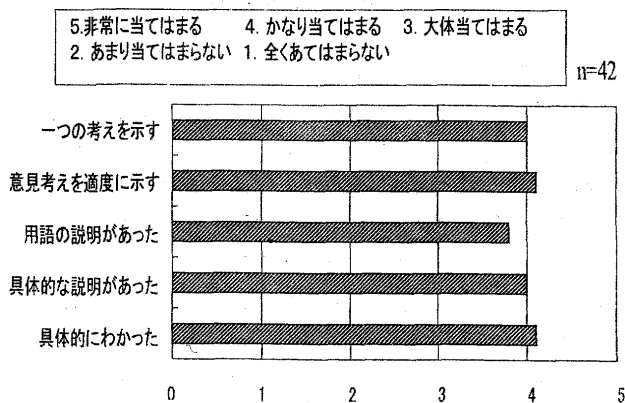


図2 下位尺度Ⅲ(具体と抽象の関連と教員意見の折り込みの程度)

2) 「Ⅲ. 教材の活用」の内訳

領域Ⅲの7つの下位項目をみると、最も高かったのは、「教材を見せたり、配ったりするだけでなく、説明を加えていた」と「いくつかの教材を適切に組み合わせていた」の2項目が4.1点で同率であった。次いで、「黒板やOHP、資料などの文字は読みやすかった」が4.0点「わかりやすく工夫した教材を用いていた」が3.9点、「資料・スライドなどの教材の量は適切であった」「教材を学生に示している時間は適切であった」「資料・スライドなどの出典や参考文献を示していた」の3項目が3.8点で同点だった。(図3)

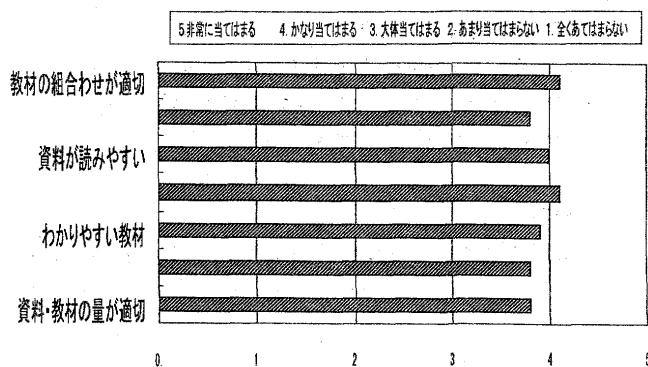


図3 下位尺度Ⅲ(教材の活用・工夫方法) n=42

3) 「Ⅰ. 看護過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達」の内訳

領域Ⅰの8つの下位項目をみると、最も高かったのは「今後に役立つ内容の講義であった」と「教員は看護師や看護を重要なものと価値づけていることが伝わった」の

2項目が4.1点であった。次いで、「事例や経験談は、多すぎることも少なすぎることもなかった」が3.9点で、「抽象的な話に終始することのない講義であった」と「講義内容は無駄や重複がなく、順序立てて整理されていた」の2項目が3.8点であった。「講義のテーマ・目的がわかりやすい展開であった」が3.4点で、「講義の要点がわかりやすい展開であった」と「講義の結論が明確な展開であった」の2項目が同点の3.3点であった。(図4)

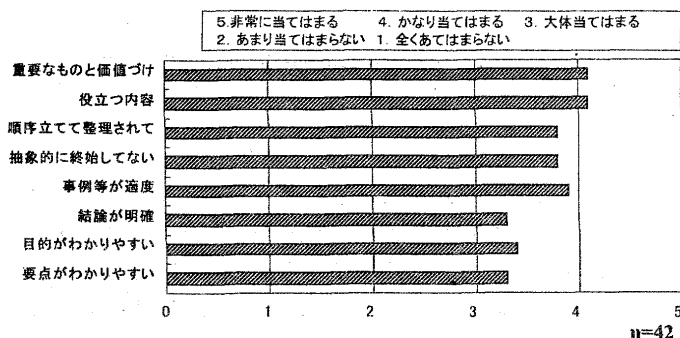


図4 下位尺度Ⅰ(講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達)

4) 「Ⅵ. 内容の難易度と時間的ゆとり」の内訳

領域Ⅳで最も高かったのは、「講義時間をむやみに延長したり、短縮することはなかった」が4.1点であった。「専門用語やなじみのない用語は、多すぎることも少なすぎることもなかった」3.8点、「ノートをとるための時間は丁度よかった」3.7、「講義の進み方は速すぎることも遅すぎることもなかった」3.6点、「難しすぎることも優しすぎることもない授業であった」が3.4点となっていた。(図5)

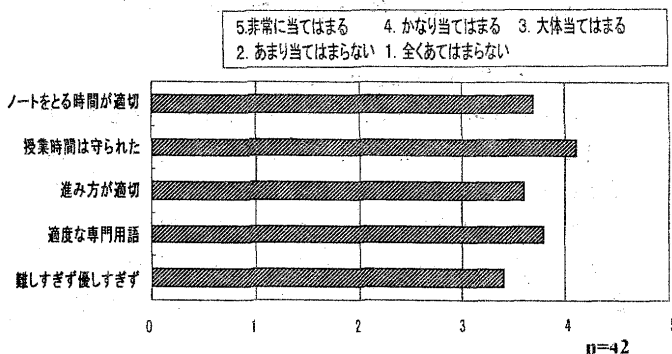


図5 下位尺度Ⅳ(内容の難易度と時間的ゆとり) n=42

5) 「Ⅶ. 教員の話術」の内訳

領域Ⅶの3項目の中では、「教員の話す速度は速すぎることも遅すぎることもなかった」が3.8点で、「教員の声は明瞭で聞き取りやすかった」が3.7点、「教員の話し方は単調ではなかった」が3.6点であった。(図6)

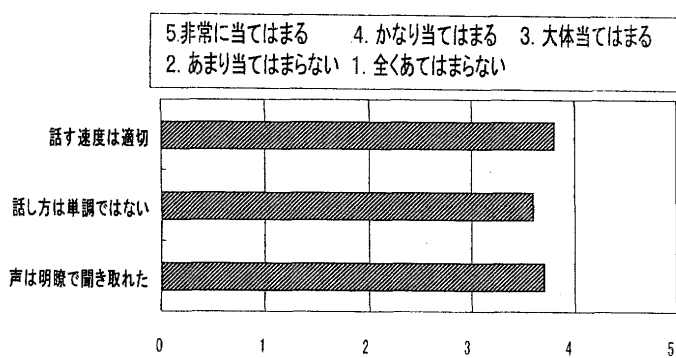


図6 下位尺度VII(教員の話術) n=42

6) 「V. 内容の質と独自性」の内訳

領域Vの4項目では、「講義の内容は表面的でなく心に響くものであった」と「豊富な内容を含んだ講義であった」の2項目が3.8点と高かった。次いで、「その教員にしかできない講義であった」が3.6点で、「新鮮さを感じる講義であった」は3.1点であった。(図7)

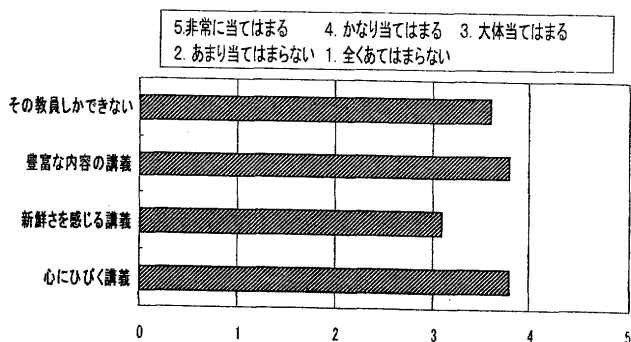


図7 下位尺度V(内容の質と独自性) n=42

7) 「II. 学生への対応」の内訳

領域IIの6項目の中では、「教員は学生を尊重した態度で講義を展開していた」が4.0点、次いで、「学生への質問は量は多すぎることなく少なすぎることなかった」と「学生への質問のタイミングや方法は適切であった」の2項目が3.7点であった。「教員は学生の反応や理解を確認していた」が3.6点、「教員は学生への一方的な講義では

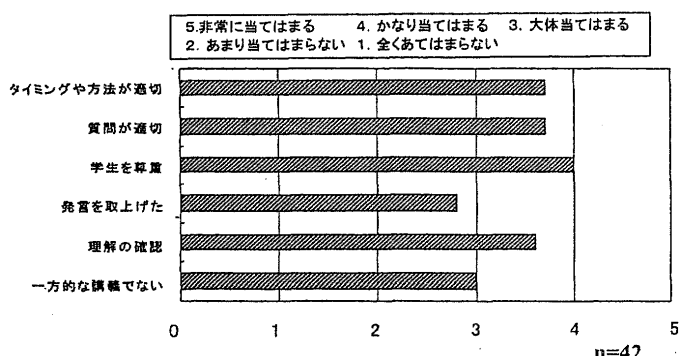


図8 下位尺度II(学生への対応) n=42

なく学生も参加できた」が3.3点、「教員は学生の発言を取上げて講義を進めていた」が2.8点と最も低かった。(図8)

2. 総得点から見た高・中・低得点別項目の内訳

「授業過程評価スケール」は各領域の総得点によって、「高得点領域」「中得点領域」「低得点領域」の三階層に分けられる。

1) 「高得点領域」の項目

全領域の38項目の中で総得点が164点(平均4.1点)以上の「高得点領域」は7項目あった。中でも、領域Iの「教員は看護師や看護を重要なものと価値づけていることが伝わった」と領域VIの「講義時間をむやみに延長したり短縮することはなかった」は165点で最も高かった。領域Iの「今後役に立つ内容の講義であった」と、領域IIIの「教材を見せたり、配ったりするだけでなく、説明を加えていた」と「いくつかの教材を適切に組み合わせていた」の2項目、領域IVの「具体例・事例・経験談などで抽象的な内容が具体的にわかった」と「教師自身の意見や考えを適度に示していた」の2項目も高得点領域であった。

2) 「中得点領域」の項目

次いで、総得点が122点から163点以下の「中得点領域」の項目をみると、合わせて30項目が該当した。「中得点領域」は得点差が大きく、平均点が4.0点となる総得点158点から163点に該当するのは、IIの「教員は学生を尊重した態度で講義を展開していた」、IIIの「黒板やOHP、資料などの文字は読みやすかった」、IVの「難しいテーマや内容については、実例を示したり、具体的な説明があった」と「一つの考え方として教員自身の意見を示していた」の計4項目であった。後の26項目が122点から157点以下であった。

3) 「低得点領域」の項目

総得点が121点以下の「低得点領域」に該当した項目は、領域IIの「教員は学生の発言を取上げて講義を進めていた」の119点の1項目のみであった。

V. 考察

成人看護学Aの「循環障害をもつ患者の看護」の授業評価を「授業評価スケール-看護学講義用-」を用いて実施した。

7領域の総得点の平均は148.4点、下位項目の平均点は3.7点であった。この結果は「中得点領域」に位置し、学生の評価が平均的な講義であったといえる。この結果を、舟島⁴⁾らの調査した看護系大学5講義の結果の平均値と比較すると、学生数は同数、総得点は1点差、平均得点は同点であった。これらのことから、講義内容・対象学生などの条件が違っても、本授業は平均的な評価であった判断できる。

では、この授業の成果と改善の課題は何か。

1. 教育内容の妥当性

循環障害をもつ患者の看護は急性期からリハビリ期まで幅広く、患者のアセスメントにもとづく看護に必要な知識や技術を身につけるには困難が伴う。病態学で履修した抽象的な知識と具体的な患者の実態とを結びつけて理解することが求められる。

本授業の「Ⅳ. 具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」は平均4.0点であり、最も高得点の領域であった。この領域は、抽象度の高い内容や専門用語をわかりやすく説明しているか、また説明する際に教員個人の見解をどのように織り込んでいるかなど、教員の説明技術を測定する項目である。臨床経験がない看護学生にとって具体的な事例を用いた授業は、講義により理解しやすかったのではないかと考える。

また、「Ⅴ. 内容の質と独自性」の下位項目である「講義の内容は表面的でなく心に響くものであった」と「豊富な内容を含んだ講義であった」が3.8点と平均点より高かった。「Ⅰ. 看護過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達」の下位項目である「今後役立つ内容の講義であった」と「教員は看護師や看護を重要なものと価値づけていることが伝わった」も4.1点と平均点を上回る評価を得た。これらの結果から、本授業の内容は学生たちにとって意義あるものとして、そして今後役立つものとして受け止められていたことがわかる。

しかし、「新鮮さを感じる講義であった」は3.1点で平均点を下まわった。重要で不可欠な内容であることは、学生にとっては新鮮さを感じないものになりがちである。重要で不可欠な内容であっても、学生が新鮮さを感じながら学ぶことができるような授業構成・展開の工夫が求められる。

2. 具体的事例を用いた教材の工夫

具体と抽象を関連づけて循環障害をもつ患者の看護について学ぶことができたのは、「具体例・事例・経験談などで抽象的な内容が具体的にわかった」からであり、「難しいテーマや内容については、実例を示したり、具体的な説明があった」からである。

これらを反映して、「Ⅲ. 教材の活用」領域の平均点は3.9点であった。その下位項目では「教材を見せたり、配ったりするだけでなく、説明を加えていた」と「いくつかの教材を適切に組み合わせていた」が4.1点で高い評価であった。さらに、「黒板やOHP、資料などの文字は読みやすかった」も4.0点と続いた。「わかりやすく工夫した教材を用いていた」や「資料・スライドなどの教材の量は適切であった」「教材を学生に示している時間は適切であった」「資料・スライドなどの出典や参考文献を示していた」なども平均点以上であった。これは、教材の量や種

類、資料の提示時間など「教材の活用」に関する学生の評価の高さを示している。

また、「教師自身の意見や考えを適度に示していた」「一つの考え方として教員自身の意見を示していた」などが高い評価を得た。このことは、ただ具体的な事例を収集し、授業で教材として提示・活用するだけではなく、教員が自分自身の経験や知見を適切に語ることの有効性を示している。教員としてだけではなく、一人の看護師としての意見や考え、経験談を聞くことが、学生の学びを刺激するものとなるのである。

3. 学生の学びを組織する教授行為の工夫

授業における教員の教授行為に関しては、「Ⅰ. 看護過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達」において「事例や経験談は、多すぎることも少なすぎることもなかった」や「抽象的な話に終始することのない講義であった」「講義内容は無駄や重複がなく、順序立てて整理されていた」などが平均点を上回った。

「Ⅳ. 内容の難易度と時間的ゆとり」において「講義時間をむやみに延長したり、短縮することはない」と4.1点、「専門用語やなじみのない用語は、多すぎることも少なすぎることもなかった」や「ノートをとるための時間は丁度よかった」は平均点を上回った。

「Ⅶ. 教員の話術」において「教員の話す速度は速すぎることも遅すぎることもなかった」、「教員の声は明瞭で聞き取りやすかった」、「教員の話し方は単調ではなかった」ともおおむね平均点であった。

さらに、「Ⅱ. 学生への対応」において「教員は学生を尊重した態度で講義を展開していた」が4.0点で平均点を上回った。「学生への質問の量は多すぎることもなく少なすぎることもなかった」と「学生への質問のタイミングや方法は適切であった」は平均点と同じであった。

以上のように、具体的でわかりやすく整理された説明、学生の学習状況をふまえた指示や適切な話術が高く評価された。

しかし、「教員は学生の反応や理解を確認していた」や「教員は学生への一方的な講義ではなく学生も参加できた」は平均点を下回った。特に「教員は学生の発言を取上げて講義を進めていた」が2.8点と最も低い評価であった。本授業は、一方的で参加しにくいものと学生たちは評価したのである。学生の質問やわからないことの確認とそれへの対応、学生の意見を取り上げ、そこから討論を導いていく方法が不十分であった。授業内容を盛り込みすぎることなく、学生たちの主体的な学びを引き出し、組織していく授業が求められる。

このような授業における学生の主体的な学びの位置づけに関しては、舟島ら³⁾の研究でも平均得点より低い。学生が発言できる機会を増やし、一方的な展開にならな

いように授業を改善していくことは、本授業だけではなく、多くの看護教育に共通する課題であると言える。

また、講義の進み具合や難易度では平均点を若干下回った。一般的に敬遠されがちな循環器の領域では授業時間の枠が少なく、難易度の高い内容を短時間で多くのことを講義するには、学生に必要な授業内容の精選と、授業方法・工夫が必須となる。

看護教育を担う教員の授業におけるコミュニケーション能力を高めると同時に、学生の主体的な学びと参加をつくり出すことが、学生の授業評価を高める鍵を握っている。

VI. 結論

以上の結果から、以下のような結論を得た。

1. 授業評価の平均は、3.5点であった。
2. 平均得点の高かった領域は、「具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」の4.0点で、低かった領域は「学生への対応」3.3点であった。
3. 授業評価の高かった下位項目は、「具体例・事例・経験談などで抽象的な内容を具体的に説明」で、低かった下位項目は、「学生への一方的な講義ではなく学生の発言を取上げ、学生も参加できる」であった。
4. 抽象的な知識と具体的な患者の実態とを結びつけた理解の形成を教育内容とすることが妥当である。
5. 具体的事例を用いた教材の工夫をすることが、抽象と具体とを結びつけた学びをつくり出す。
6. さらなる授業の改善には、学生の学びを組織する教授行為の工夫が不可欠である。

VII. 限界と課題

本研究の授業評価は学生と教員の相互行為である授業過程の評価に焦点をあてた他者評定尺度を測定用具として用いたものである。平均値を参考に講義を自己評価するだけでなく、授業の目的・目標がどの程度達成できたかという学習達成度と関連させながら評価結果を解釈する必要がある。今後は学生の学習達成度と組み合わせた授業評価を行い、授業改善を深めていきたい。

謝辞

本研究の調査に協力をいただいた平成19年度入学の看護学科学生の方々に心から感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 舟島なをみ監修, 舟島なをみ, 山澄直美, 松田安弘 他著: 看護実践・教育のための測定用具ファイル, 医学書院, 75-84, 2008
- 2) 前掲書1), 81
- 3) 宮崎和子監修, 富田幾枝編, 小野晴子: 術後患者の観察, 中央法規出版, 128-181, 2001
- 4) 前掲書1), 83
- 5) 前掲書1), 81
- 6) 鈴木美和, 亀岡智美, 舟島なをみ: 講義における教員と学生の授業過程評価の差異, 看護展望, 28(5), 43-48, 2003
- 7) 中谷啓子, 舟島なをみ, 杉森みど里: 授業過程を評価する学生の視点に関する研究-講義, 看護教育学研究, 7(1), 16-30, 1998
- 8) 舟島なをみ, 杉森みど里, 定廣和歌子: 学生が評価主体となる看護系大学授業過程評価スケール(講義用)の開発, 千葉大学看護学部紀要21, 1-7, 1999

A study of the assessment of the "Patients with circulatory failure" class in adult nursing

Haruko ONO, Yoshihisa SUMINO

The department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

This study was conducted to identify ways to make improvements, based on an assessment by students, to the "Patients with circulatory failure" class in the "Adult Nursing A" course as well as its teaching methods and materials. We conducted a survey of second-year nursing students of Junior College A, using a "scale to assess the teaching process in nursing lectures".

Regarding the assessment of the class, the average score was 3.5 points. A high score was achieved for an assessment item: "Explanation of the relationship between concrete and abstract matters and an appropriate level of opinions from instructors". The most common comment from students was "Specific examples and experiences were used to explain abstract matters".

The score for "response to students" was 3.3 points, slightly lower than the average. Their comments included: "Lessons were not interactive, and we just listened to the instructor" and "We had no opportunity to express our opinions in the class".

Therefore, it is important to improve the class by providing more interactive lessons, and encouraging students to express their opinions.

Keywords: Adult nursing, Assessment of class, Scale to assess teaching process